

# こぎん刺しの美の特性と今後に向けて

## The Beauty and Future of “Kogin”

青木 あすみ

Asumi Aoki

### 要旨

近頃、若者がこぎん刺しのアイテムを身に着けているのをしばしば目にする。それらは30代から40代を中心とした作家によって作られているものも多い。書籍や雑誌においてもそれらが取り上げられていることから、こぎん刺しの注目度が高まりつつあると考えられる。こぎん刺しは江戸時代の藩政における衣服の制限と、津軽地方の気候条件が生み出した手仕事である。極寒の冬を乗り越えるための保温効果の追求が、結果としてこぎん刺しの要である緻密かつ大胆な幾何学模様を生んだ。交通網の発達や環境の変化等により一旦衰退したものの、昭和初期以降に再興を果たしたこぎん刺しは、古作とは異なる素材の使用や配色が成され、美しい幾何学模様として生活の中に取り入れられていった。今日でもこぎん刺しの模様と手法は時代に合わせて進化している。しかし一方では、発展という名のもとに従来のこぎん刺しの認識とは大きくかけ離れつつあるものも見受けられ、こぎん刺しの伝承が懸念される。本論では文献調査と現地調査を行い、こぎん刺しの美しさの特徴を明らかにし、未来へ継承する上で求められるものを考究した。

●キーワード：こぎん (kogin) / 手仕事 (handwork) / 伝統 (tradition)

### I. はじめに

こぎん刺しとは津軽地方に伝わる、刺し子の一種である。かつて刺し子は日本各地に存在した、布地に糸を縫い刺し衣服の補修と保温を目的とするものであった。

こぎん刺しは、一度は衰退した技術である。それが今日に至るまで伝承されたのは、民藝運動の創始者であり民藝の父と称される柳宗悦の存在が大きい。柳宗悦はこぎん刺しの模様やその誕生背景を称賛し、衰退したこぎん刺しを自ら収集して、書籍等により再度世の中に提示した。これをきっかけに、色や素材は時代にあった変化を遂げ、人々の日常に再び取り入れられた。

現在の新作のこぎん刺しの多くは、日常生活とは少し離れた「民芸品」や「土産品」として扱われることが多いが、それとは対照に最近の20代から30代の若者の間で「可愛くおしゃれ」<sup>1)</sup>なアイテムとして、雑誌や店舗等で取り上げられている。このことはこぎん刺しの継承において大変有望なことであり、今後への大きな一歩と言えるだろう。しかし、その一方でこぎん刺しの名を語りつつも従来のこぎん刺しとは色、模様、技法において異なるものが見受けられる。

以上のことから、こぎんがこぎんである美の特性を明らかにすることは、こぎん刺しを未来へ継承していく上で急務であると考えられる。そのため本論では、まず、こぎん刺しの原点を探り、美の特性を明らかにする。次に、文献での変遷調査と、フィールドワークでの現地調査を行う。それらをふまえて、昨今のこぎん刺しにおける可能性と問題点を明らかにし、今後に向けての考察を行う。

### II. こぎん刺しの歴史

#### 1. 津軽地方の気候とこぎん刺しのはじまり

本州の最北端に位置する青森県は、春から夏にかけて、東よりの冷たく湿った風、通称「やませ」が吹く。長引くと日照時間が減少し、気温が低くなり、様々な悪影響を与えていると言われている。秋から冬は大陸から冷たく乾燥した季節風が吹き、東北の南北に連なる奥羽山脈によって遮られた季節風は、日本海側に留まり雪を降らせる。また、山脈を越えた風は乾燥しており晴天が続く傾向にはあるものの、低気圧の通過等により、大雪をもたらすことも少なくない。天候は農作物の生育にも影響を及ぼしている。

江戸時代中期、北国である津軽の地では南国生まれの綿花は育たず、育てられていたものは主に大麻と苧麻が中心であった。当時、大麻は一般的に普及しており一年生植物のため、比較的手間がかからなかった。また、苧麻は多年生であり、収穫量も大麻に比べて少ないため、貴重なものとして育てられた。人々はその麻から糸をとり、それを手織りし、衣服として着用していた。

津軽地方は全国的に見ても気候の異変による作物の凶作、また凶作による飢饉が非常に多かったと記録が残されている<sup>2)</sup>。凶作の際には、衣よりは食が優先され、衣類は補修を繰り返すなどして節約された。こぎん刺しはこうした苦勞から必要に応じて生まれた作業であったが、極寒の冬の夜に家にこもり手仕事を行う生活は、女性たちに安らぎをあたえ、結果的にそれが一つの文化として根付いたのである。

上述の気候条件に加え、刺し子の発展には藩政が大きく関係している。江戸時代の封建制度が農民生活における全国的な刺し子誕生の原点と言える。農民は將軍・大名などの大土地所有者に対し年貢を納め、最低限の生活が維持できるだけの生活用品以外の使用は禁止されていた。衣服に関しても例外ではなく、全国的にみてもほとんどが麻または木綿の手織りであり、色は紺・鼠・柿の無地または縞というように、とても衣服の贅沢などできない生活であった。全国的に衣服統制は厳しかったが、大飢饉に見舞われやすかった津軽地方では、更に厳しく、1703年(元禄16年)弘前四代藩主津軽信政の時代では、木綿の栽培が困難であったため、ほとんどの人が四季を通して藍で染められた紺の麻地を着用していた。麻は擦り切れやすく、肌触りも悪いため北国の衣服としては不向きであるが、それに代わるものもなく、麻に頼るしかなかった。

こぎんについての記録では1695年(元禄8年)『弘前藩庁日記』に「古布こぎん」「上こぎん」とあり、こぎん刺しの意と同意であるか、また模様があったかは定かではないが、こぎんの文字を見られるものの最古とされている<sup>3)</sup>。

また、1724年(享保9年)弘前五代藩主信寿により「農家儉約分限令」が出され農民の衣食住全般が更に厳しく制限され、その中に「小布(こぎん)」の着用を促す文書が記されている。ここでのこぎんとは、麻布で作られた労働着のことを指すと考えられる。これがこぎん刺しの語源にあたとされ、補強のために糸が刺されたものを「こぎん刺し」あるいは「刺しこぎん」と呼ぶよ

うになったと言われている<sup>4)</sup>。

また、こぎん刺しの様子が図版として残っているものには、1788年(天明8年)に津軽藩江戸詰藩士比良野文蔵貞彦が津軽を訪れた際、その土地の風俗を写したと言われる『奥民図彙』がある。その絵にはすでに、現在に伝わるこぎん刺しに通ずる模様が見て取れる(図1)。

1847年(弘化4年)津軽藩内印行の『春興刷』の図版では、庶民とおぼしき女性達は模様が施された着衣を身に着けている。前者の『奥民図彙』よりも更に模様が確立されている様子であり、複数の庶民らが描かれていることから、こぎん刺しが一般的に用いられていたことが伺える(図2)。

両者の特徴として、まず『奥民図彙』は模様が身頃から袖まで通して入れられ、配置は肩部分と裾部分に分けられて施されている。配置により「常躰(じょうたい)」、「惣サシ(総刺し)」、「伊達サシ(伊達刺し)」と分類されており、背中部分に刺すものは常躰、背面・袖一面が総刺し、背中から両袖口が伊達刺しとされていた<sup>5)</sup>。

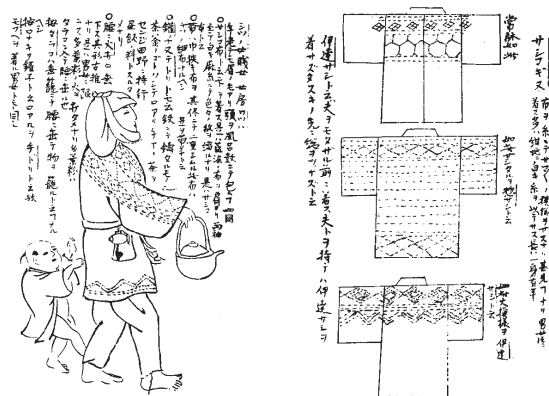


図1 『奥民図彙』



図2 津軽藩内印行『春興刷』

その後の『春興刷』では多くの女性達がこぎん刺し、あるいは刺し子が施されたものを着用している。模様の入り方は上半身身頃に限定されている。また袖丈の短さから労働着としての機能性の向上が考えられ、擦り切れやすい袖や下半身は取り換えられるような切り替えとなっており、こぎん刺しが施された部分は大切に扱われたと臆測する。

記録として明確に残されていないが、綿糸の栽培と入手が困難であった当時のこぎん刺しは、ほとんどが麻糸で施されていた可能性が高い。初めは生地と同じく藍で染められた麻糸で模様などはあまり考えず、ただ補強や補修、保温効果のために刺し埋めていたが、麻糸を染めずに刺すことにより、それが目立ち模様として引き立つ。そのようにして厳しさの中での知恵や工夫が、現在に残るこぎん刺しの特徴である模様への始まりであったと考える。

## 2. こぎん刺しの開化と衰退

明治時代に入ると、廃藩により各藩での統制に終止符が打たれ、1869年（明治2年）以降藩内の禁令は解消されることとなった。

全国的に衣服に対する統制は緩み、津軽地方でも少しずつではあるが綿糸の使用が可能になった。そうになると女性達は積極的に綿糸を使用し、こぎん刺しの全盛期を迎えることとなった。綿糸は麻糸に比べ、なめらかで麻布の織り目に入りやすく刺しやすい。綿糸の保温性と、利便性から女性達の刺す模様はより一層発展した。また、この頃は藍で染められた紺の麻地に白の綿糸で刺しが施されていた。紺の生地に白糸の模様が引き立ち、時間をかけて施した模様が非常に映える。当初、こぎん刺しは労働着や野良着などの日常着に施すものとされていたが、数々の美しい模様が生み出されると、それを全面的に披露しようと、晴れ着等にも用いられるようになった。その女性達の知恵と熱意は娘へと伝えられ、当時は7、8歳頃から運針の練習をはじめ、20歳前後の嫁入りには自身の知恵と技術の結晶ともいえるこぎん刺しを数枚持っていくことが慣習となっていた<sup>6)</sup>。労働着だけに留まらなかったことが女性たちの創意を掻き立て、知恵と感性が詰まった模様へと発展したのである。

1891年（明治24年）以降になると、東北本線の開通により交通網が大きく変化し、津軽地方でも木綿の衣類が手に入りやすくなった。更に衣生活の変化と針子の高齢化などの理由が相まったことにより、時間をかけて布地を刺し埋める必要も無くなり、次第にこぎん刺しは衰

退していった<sup>7)</sup>。

## 3. こぎん刺しの再興

衰退したこぎん刺しが再度甦ったことは、柳宗悦の力なくしては不可能であったと言えるだろう。柳宗悦は言わずと知れた民藝研究家であり、宗教哲学者である。「民藝」<sup>8)</sup>の言葉を作り、1926年（大正15年）以降、日本民藝運動の中心となった人物である。彼が『工芸十四』（1932年）紙上でこぎん刺しを取り上げたことで、こぎん刺しが再度注目されるようになった。柳宗悦は「醜いこぎんはない、一枚とてない（中略）刺す者はその布目に忠順である。はずせばもうこぎんではなくただの刺繍である（後略）」<sup>9)</sup>と記しているように、こぎん刺しの美を提唱し、こぎんの定義を唱え、再興に多大なる影響を与えたのである。さらに『手仕事の日本』（1954年発行）では「今も冬はあり、今も女たちはあり今も技が残るのですから、こういう刺子こそ何か新しい道で生かすべきではないでしょうか。」と記し、津軽地方の刺し子を評価している<sup>10)</sup>。

その柳宗悦の意思を現在もお引き継いでいるのが「有限会社 弘前こぎん研究所」である。前身は1932年（昭和7年）に設立された財団法人木村産業研究所であり、農村において家内工業の興起を目的に活動していた。そこへ柳宗悦の強い勧めによりこぎん刺しの研究を開始し、こぎん刺しの収集、調査、研究を行ってきた。戦後津軽地方の産業は衰退し、残された道はこぎん刺ししかないという考えから1962年（昭和37年）現在の社名へと変更し、今日に至る<sup>11)</sup>。

こぎん刺しの模様には「モドコ」と呼ばれる基礎単位模様があり、その組み合わせで全体の模様が構成されている。同社は収集した資料やかつての刺し手に話を聞くなどして、このモドコを明らかにした。

しかし、再度光が当たったこぎん刺しも1970年（昭和45年）頃に民藝ブーム<sup>12)</sup>が終息するとともに、こぎん刺しに対しての人々の関心も薄れていったと考えられる。

なお、現在は再興以前のこぎん刺しを「古作」と称し区別している。

## III. こぎん刺しの模様の特徴と表現の工夫

### 1. 奇数律と偶数律

こぎん刺しを含む地刺しと呼ばれる織り目を拾う刺し子は、経糸に対し横刺しして模様を形成するが、拾う緯糸の本数を奇数律か偶数律にするかによって、表れる模様が大きく異なり名称も変わる。また、どちらかの律と

決めたら、最後まで一定律にしなければ生地と目数が合わなく、模様の納まりが悪くなる。布目に沿って水平、垂直に刺し進めるため、単位模様は必然的に左右対称の模様となる。

津軽のこぎん刺しは経糸を奇数律ですくい、横刺ししていくことで模様が形成されていく。1目、3目、5目…と奇数律でずらしながら刺し進めていくため、模様は縦長となる。一方、偶数律で2目、4目、6目…とずらしながら横刺しすると模様は横長となる。偶数律の刺し子として南部の菱刺しがあげられる。

南部の菱刺しとは旧南部藩にて誕生した刺し子である。偶数律で横刺しされるため、横長の菱型模様が特徴的である。その誕生背景は津軽のこぎん刺しと同じく、自然条件と衣服統制にあったと考えられる。八甲田山を挟み、津軽は水田地帯、南部は畑作地帯と農耕形態が異なった。両者に地刺しを施す際、津軽のこぎん刺しでは水田においての泥汚れを避け、上半身の長着に模様が集中し、一方南部の菱刺しでは「タツツケ」と呼ばれる股引きや前掛けなど、下半身の衣服での発展が特徴的である。また南部の菱刺しは、はじめはこぎん刺しと同じように、麻や綿が使用されていたが、大正時代になると色のついた毛糸が少しずつ手に入るようになったことから、ふっくらとした色鮮やかな日常用、またはよそ行き用の前掛けが発展した。

両者の模様の特徴点としては、南部の菱刺しはほとんどが決まった大きさの菱刺しをタイルのように構成し刺されていることと、毛糸の色の鮮やかさにあることにある(図3)。それに対し、津軽のこぎん刺しはモドコを基本とした基礎単位模様が所狭しとびっしり埋められ、紺色の麻地に木綿糸の白という限られた色であったからこそ、そのコントラストが大いに生かされている点にある。また奇数律は1目ずつ目をずらしていく為、偶数律よりも細かく布目を刺し埋めることが可能となり、構成によって柄の強弱が付けられ、緻密さと大胆さを併せ持つ模様の表現へと繋がったと考えられる(図4)。

## 2. 基礎模様と連続模様

こぎん刺しの模様を構成しているのは基礎単位模様である「モドコ」と、その組み合わせである連続模様である。

### (1) モドコ(基礎単位模様)

こぎん刺し模様の最小単位である基礎単位模様を「モドコ」と言う。モドコとは津軽の言葉であり、「もとになるもの」を意味し、それが「もとこ」→「もどこ」へ

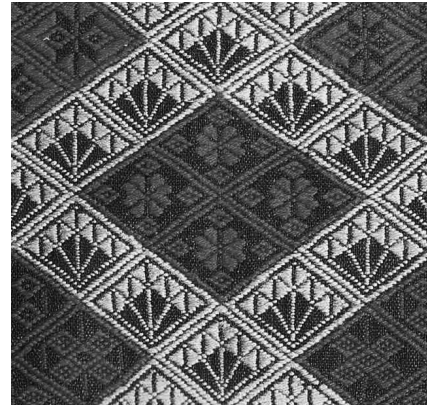


図3 南部の菱刺し

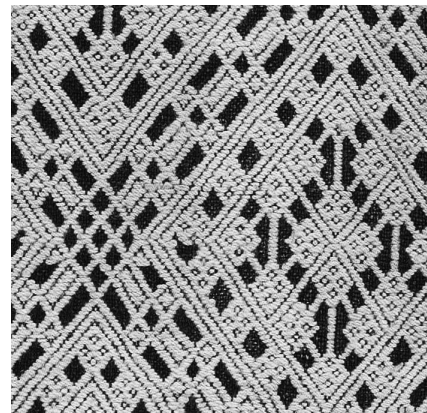


図4 津軽のこぎん刺し

と変化した。かつての女性たちが思い思いに刺した柄を、有限会社弘前こぎん研究所にひとつひとつ分析し、基礎単位模様を示した。モドコの模様の名称は津軽の言葉で名づけられたものが多く、例えば「フクベ(ひょうたん)」や「テコナコ(蝶々)」など、生活や自然に根付いたもので成り立っている。

現在となっては、このモドコが定義されたからこそ、こぎん刺しが学びやすく、現代の人々でも再現しやすくなり、こぎん刺しを伝える上で必要不可欠であったと言える。その種類は現在40種類ほど存在しており、そのほとんどが津軽の生活や自然に由来する模様と名称がつけられている。そのことから、こぎん刺しがいかに当時の津軽の人々の生活に根付き、親しまれていたかが伺える。モドコの一部を以下に示す(図5)。

### (2) 連続模様

模様を広範囲に展開する方法のひとつとして、模様を連続して刺す方法が用いられた。ひとつの単位模様を単純に連続して刺すだけでなく、模様の中に「流れ」や「囲み」と呼ばれる、模様と模様を繋ぐ小さな刺しの繰

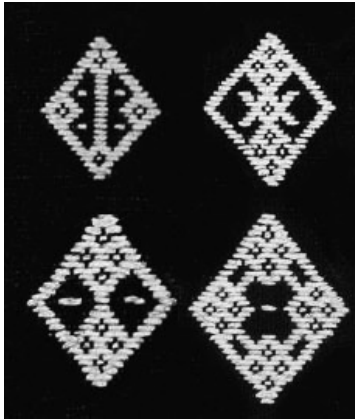


図5 モドコの例

左上：フクベ（瓢箪） 右上：テコナコ（蝶々）  
 左下：猫のmanaグ（眼） 右下：ベコザシ（牛）

り返しを入れ、大きな模様へと発展させた。これにより、全体の模様は、より動きの感じられるものとなり、その組み合わせによって模様の表現は無限に広がるのである。当時の女性達はその組み合わせ方や展開の仕方を工夫し、腕を競い合った。連続模様にも「カチャラズ（止まらず）」や「亀甲合わせ」など津軽の言葉で名づけられている（図6、7）。

### 3. 地域ごとの工夫

こぎん刺しの模様は地域ごとに分類され、その特徴点は異なる。岩木川を境に「東こぎん」、「西こぎん」、「三縞こぎん」と3種類に分類されている（図8）。

#### (1) 東こぎん

東こぎんは弘前城からみて東側にあたる地域とし、当時は穀倉地帯であった。そのため夏場に農作業をし、冬場は農作業を休めるだけの比較的こぎんを刺す時間があった地域とも考えられる。そのため残存する古作の中では、その割合が一番多いとされている。太めの麻糸が使用され、織り方は粗く、その粗い布に刺し縫られたため必然的に柄は大柄になったと考えられる。また、他地域にみられる縞模様はほとんどなく、模様が途切れることなく身頃全面に刺され、大きい柄と緻密さにより藍染めの地布と糸の白さとのコントラストが際立った迫力のある模様が特徴である。

#### (2) 西こぎん

西こぎんは弘前城からみて西側の中津軽郡で作られていたものを指す。山村が多かったため、荷を担いで移動が多かった理由から、肩部分に模様を配置することで肩への負担が軽減される工夫がされている。山道での外敵から身を守るため、肩の後ろ部分には魔除けを意味す

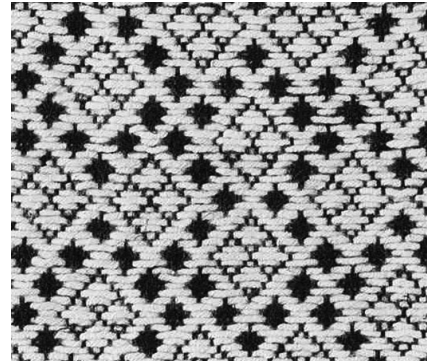


図6 連続模様  
カチャラズ（止まらず）

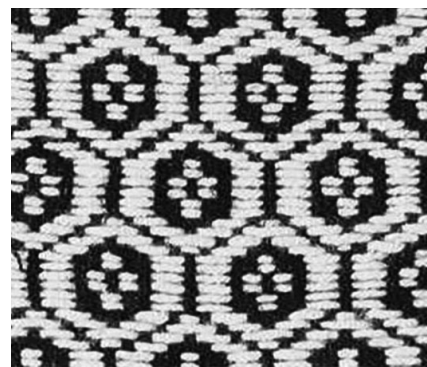


図7 連続模様  
亀甲合わせ



図8 3種類のこぎん刺し  
左：東こぎん、右：西こぎん、下：三縞こぎん

る「逆さこぶ」と言われる模様が刺された。

この地方の布地は麻糸が細く、織り目が細かいことから良質な生地とされ、その細かい目に刺される模様は他と比べ必然的に細くなり、女たちには器用さと労力が求められた。そのことから津軽地方では「嫁を貰うなら

西から貰え」とも言われていた。

### (3) 三縞こぎん

三縞こぎんは弘前城からみて北部に位置する金木町を中心する地域で、度重なる冷害と凶作により特に生活の余裕がなかったと考えられている。そのため農民の中でも全ての人がこぎんを刺す余裕がなかったと考えられ、残存する古作の量は他と比べ極めて少ない。

前後身頃に3本ずつ入った縞模様が特徴的であり、その縞模様により身頃を分割し、連続の模様で起こりやすい模様崩れを避け、少ない時間でもこぎんを施しやすいするための工夫と考えられる。

## 4. 補修の工夫

こぎん刺しは一度擦り切れたからと言って捨てられるようなものではなかった。その補修方法として、二重刺しこぎんと、染めこぎんが挙げられる。着古され、ほころんだこぎん刺しには手が加えられ、模様が擦り切れたらなるべく模様が残るように重ねて刺されたり、また汚れが目立ってきたら染め直されたりと、その痛みの程度によって修復され、大切に着用された。

### (1) 二重刺しこぎん

長年着用する間に擦れた部分を補うために、上から刺し重ねる行為であり、それを何度も繰り返し、最終的には地が見えなくなるほど刺し埋められることもあった。刺し埋めるにも、不規則ではなく地模様を辿るように刺されたことが伺え、いかに模様を大切にしていたかが理解できる。

### (2) 染めこぎん

二重刺しこぎん後、更に木綿糸が汚れてくると、こぎん全体を再度藍で染めたものを染めこぎんと呼ぶ。主に作業着として使用された。それだけではなく年配者がお洒落着として好んだり、新しい白の鮮やかさを恥ずかしみ、わざと染めてから身に着けたりすることもあった<sup>13)</sup>。

## 5. こぎん刺しの美的特性

こぎん刺しの模様と表現の工夫から、美の特性を以下と捉える。

- ・紺色の麻地と白の綿糸を用いたコントラストの美しさが表れていること
- ・奇数律からなる基礎単位模様のモドコを用い、模様を展開する上で、模様と模様の流れに配慮し、緻密さと大胆さを兼ね備えた幾何学模様であること
- ・ひとつひとつの模様の意味を理解し、綻びても補修を繰り返し、大切にすること

## IV. 現代のこぎん刺し

ここでは再興から現在までを年代ごとに分け、比較分析を行うことで現在におけるこぎん刺しの傾向を明らかにする。

方法は文献を主とし雑誌を補助的に取り上げ、時勢を捉えることとする。資料の選定基準はこぎん刺しの再興以降、国立国会図書館<sup>14)</sup>に納本され、タイトルに「こぎん」と明記されている文献計41冊中、本研究に相応しいと判断した36冊を対象とする(表1)。対象年月は1940年代から、2014年の8月までとし、比較を行う上で20年ずつ区分けし分析した(2000年以降のみ14年間で区分けする)。

なお資料には目的として、「こぎん刺しの紹介のみ」のもの、「紹介と制作の手順」のものに分けておく。以下、前者を「紹介本」とし、後者を「手順本」と呼ぶこととする。

### 1. 1940年代－1960年代

この年代の資料は計10冊であった。うち9冊は紹介本であり、1冊が手順本であった。1940年代の出版はわずか2冊であり、50年代は無く、60年代に8冊であった。1940年代に本格的にこぎん刺しの研究が始まり、民藝ブームともされる1955年(昭和30年)頃以降には一部の民衆に本格的に注目され、その流行に乗るように書籍が出版されたと考えられる。

内容は、紹介本では古作の紹介や説明が主であり、手順本ではテーブルセンターや屏風、のれん、エプロン等に应用されていた。アイテムとしては平面的なものが多く、衣服というよりインテリアとしての応用が比較的多かった。

模様は古作の大胆さと緻密さが残っており、前述の東こぎんのような、大きな模様構成の中を細かい柄でぎっしりと埋められているようなものが多く、古くからの模様と方法が反映されていた。

雑誌『ミセス』(1962年8月号)ではこぎんと思われる刺し子が施された着物帯が掲載されており、「こぎん」とは記されていないものの、その可能性が高いと判断する。またこの頃から、現在もある「コングレス」と呼ばれる刺繍に適した綿100%の布が頻繁に使用され、生地色も鮮やかになり、糸はオリンパス製糸株式会社が「こぎん刺し用」糸の販売を開始し、材料の選択範囲も増え従来よりも自由な雰囲気となった。

### 2. 1970年代－1990年代

この年代は計16冊と比較的多く、うち11冊が紹介本、

表1 文献調査書籍

No.	出版年	書籍名	著者名
1	1942	工藝選書 津軽のこぎん	日本民藝協会「工芸」編集室
2	1943	津軽のこぎん	村岡景夫
3	1960	こぎん刺繍	木村操
4	1961	こぎん刺繍	婦人倶楽部編講談社
5	1961	こぎん刺繍：北国の民芸	婦人画報編婦人画報社
6	1965	こぎん刺繍 2	三宅喜久子
7	1965	こぎん刺繍	講談社編講談社
8	1966	こぎん	横島直道
9	1967	こぎん刺繍	三宅喜久子
10	1967	こぎん刺繍 3	三宅喜久子
11	1974	津軽こぎん	横島直道
12	1974	みちのくの造形 刺しこぎん編	高橋 一智
13	1975	津軽こぎん刺し	工藤得子
14	1976	こぎん：作品と図案集	木村操
15	1976	世界手芸の旅2(津軽こぎん)	日本ヴォーク社
16	1976	津軽こぎん刺し：基礎刺しから応用まで	工藤得子
17	1976	刺しこぎんと変刺し：津軽・南部の仕事着	青森県郷土館
18	1977	津軽こぎん南部変刺特集	不明
19	1978	津軽こぎん刺し	前田セツ
20	1979	こぎんと紅型	サントリー美術館
21	1979	津軽こぎん	日本ヴォーク社
22	1981	こぎん	三宅喜久子
23	1991	新こぎん刺繍入門	木村操
24	1995	刺し子とこぎん	国立基督教大学博物館
25	1997	さくら会創作こぎん	中津靖子
26	1998	津軽こぎん刺し子：働き者は美しい	INAX ギャラリー企画委員会
27	2000	こぎん刺し：ちょっと素敵なインテリア	高木裕子
28	2001	津軽こぎん刺し：古作模様図案集	由井正子
29	2009	こぎん刺し図案集 165 パターン：伝統のこぎん刺し	高木裕子
30	2009	こぎん刺しの本：津軽の民芸刺繍	布芸展
31	2009	こぎん刺し：津軽に伝わるやさしい手仕事	鎌田久子
32	2010	こぎん刺しの小ものたち	鎌田久子
33	2011	はじめてのこぎん刺し：幾何学模様が美しい袋物と小もの	鎌田久子
34	2012	25番手刺繍糸でこぎん刺しを楽しむ	鎌田久子
35	2013	かんたん、かわいいこぎん刺しのこもの	ブティック社
36	2013	津軽こぎん刺し：技法と図案集：基礎知識、基本と応用技法、モドコの図案を収集した決定版	弘前こぎん研究所監修

5冊が手順本であった。民藝のブームの波も去りつつあり、それとともにこぎん刺しの注目度は減少したと考えられる。手順本の内容においては1940年代-1960年代とはやや変化している。前年代はこぎん刺しを含む刺し子や針仕事自体が身近であったためか、基本的な刺し方について記されているものは少なかった。しかし、この時期は刺し方の基礎の手順からが記されており、衣生活の変化や、女性の針仕事離れを示唆するものである。

紹介アイテムは、のれんやクッション、壁掛けや敷物などインテリアとしてのものや、エプロン、バッグなど平面的なものが多かった。生地の色や糸の色、その配色は明らかに鮮やかなものへと変化しており、古作にあったような藍に白といった配色のものはほとんど見受けられなかった。古作のような広範囲に施したものは主に壁掛けや敷物など、身に着けて使うものよりは飾ったり敷いたりするものが多い。

雑誌『装苑』（1979年1月号）では、手芸講座の一環としてこぎん刺しが紹介されており、メガネケースや懷布に施されていた。また模様においては、古作やその定義の紹介を踏まえた上で、新作の提示をしているものが多いため、古作のようなモドコを基調とした幾何学模様が表現されているものが多かった。

古作の時代、こぎん刺しを含め針仕事は母から子へと伝授されていたものの、高度経済成長による社会変化や衣生活の変化、さらに古作を知る針子の高齢化などが影響し、針仕事は徐々にあえて時間を作って行う、「特別なもの」となっていったと推測される。

### 3. 2000年-現在

2000年以降は計10冊が確認できたが、うち9冊が手順本であった。30~40代のこぎん刺し作家の出現が目立ち、素材や色も変化し麻のページユをそのまま使用したり、あえてトーンの近い配色にしたりと、これまでが力強い印象であったのに対し、淡い色の女性的な印象のものが多い。アイテムはバッグやポーチなどの袋物やピクッション、コースター、ランチョンマットなどの小物が多かった。中でも、くるみボタンとしての応用はこれまでの年代には見られなかったものである。アイテムのサイズが小さいため、模様の多くは小さい単位の繰返しで構成されている。また、連続模様にはせず、ワンポイントとしての使用も多く見受けられた。くるみボタンをヘアゴムにしたり、ブローチにしたりと現在の服装にさりげなく取り入れている例も見受けられる。それらは一見こぎん刺しとは気付き辛いものが多く、非常にさりげなく模様が入り入れられている。

雑誌においては、これまでのほとんどは女性モード誌と括られる<sup>15)</sup>、やや服飾の専門的な雑誌での掲載が多かったことに対し、『STORY』や『クロワッサン』など、一般女性向けのファッション誌などに取り上げられていた。『STORY』（2013年8月号）ではこぎん刺しが、「かわいい」や「北欧テイストを思わせるこぎん刺し」などのキーワードと共に記載され、こぎん刺しの認識が他の年代とは明らかに異なっている。

刺し方の応用としては、「布芸展」<sup>16)</sup>が目の詰まった、こぎん刺しには向いていないような布地の上に、目が粗い薄手の布を当て、それを手がかりに模様を刺し、完成したら格子状の布の糸を抜く「抜きキャンバス」という技術を提示している（図9）。それはどのような布の上でもこぎん刺しを施すことができ、既製品のジーンズや靴下のワンポイントなど、織組織に関係なく取り入れる

ことができる。色や素材は更に組み合わせが増えており、こぎん刺し用以外の刺繍糸の使用や、グラデーションに染められた糸の使用など実に自由に表現されるようになった。

模様の変化として、作家の中には新たにオリジナルの基礎模様を考案したり、布目関係なく「こぎん風」に刺し加えられていたりする例も見受けられた。全体的に使用されていた模様は比較的単純なものが多く、また刺されるアイテムの小型化の影響もあり、古作や前年代に見られたような模様の大膽さや緻密さはほとんどなかった(図10、11)。

#### 4. 現代のこぎん刺しの可能性と問題点

以上をまとめると、1940年代-1960年代は再興がなされてから間もなかったため、古作の印象が強くと時は新たなアイテムに古作の模様をそのまま反映したようなものが多かった。したがって模様は大膽であり、かつ複雑なものも多く、力強い印象であった。

1970年代-1990年代において、手順本には古作の紹介と基礎的な刺し方をふまえた文献が多く、基本を認識した上でアイテムへ応用されているものもあった。配色がカラフルになったが、施される模様は古作を基調とし、アイテムによって施される範囲に差があった。前年代と同様に印象としては力強いものが多い。

2000年-現在においては出版されたほとんどが手順本であり、それらの文献には古作の詳しい説明や古作が写真として掲載されているものは非常に少なく、こぎん刺しの歴史が簡単に説明されている程度のものであった。それよりも現代のアイテムへの応用例の記載が多く、1冊あたりに掲載されているアイテム数はこれまでの年代と比べ多かった。模様は小規模になり、配色は淡い色のものが多かったことから力強さはなく、非常に女性的なかわいらしいものが多かった。

以上をふまえ、今後のこぎん刺しの可能性としては、配色の自由化、アイテムの自由化により消費者にとって身近な存在となり、更なる認知度の向上が期待できる。しかし問題点としては、手法の自由化、こぎん刺しの歴史的背景の認識不足によりこぎん刺しと他の刺し子との区別が曖昧になっていき、結果的にこぎん刺しの特徴である奇数律による幾何学模様が薄れていくことが懸念される。

#### V. 現地調査

上述までで明らかとなったこぎん刺しの歴史と模様の

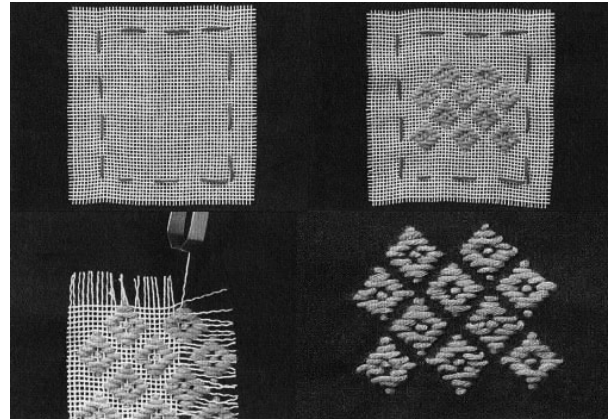


図9 「布芸展」による抜きキャンバス



図10 現在のこぎん刺し作品の一例

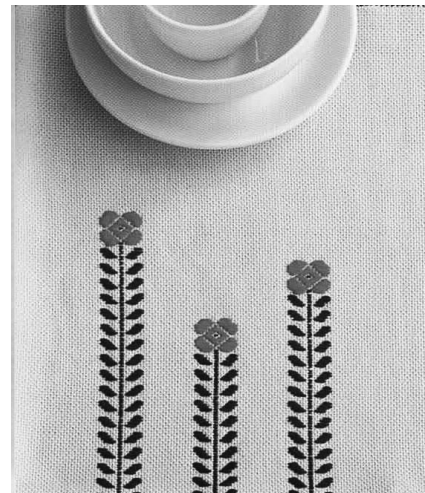


図11 現在のこぎん刺し作品の一例

特徴点をふまえ、ここでは更に現状を明らかにするため、2013年3月下旬に津軽地方を訪れ調査を行った。訪問先は弘前市内またはその近隣とし、こぎん刺しの普及・伝承を推進している施設やこぎん刺しを大々的に扱う施設とした。



## 1. 調査

### (1) 訪問先 1：有限会社 弘前こぎん研究所

前述でも取り上げた弘前市内にある「弘前こぎん研究所」は、こぎん刺しの普及・製作・販売を中心に行っている。施設は財団法人木村産業研究所内に1942年（昭和17年）有限会社青森ホームスパンとして設立後、こぎんの資料収集、基礎的研究を始め、1960年（昭和35年）に「有限会社弘前こぎん研究所」と社名を改め、古作やモドコのサンプルなど、多くの資料を保持し、こぎん刺しの普及活動を担ってきた（図12）。商品として製作しているものは、くすみボタン、名刺・カード入れ、ポーチや巾着などの袋物など、小物が中心である。製品企画、材料調達及び管理、作業分配、検品などを行い、実際にこぎん刺しを行うのは会社に登録されている弘前在住の針子である。若い方は20歳くらいから最高齢では90歳くらいまでの合計90名ほどいるという。仕事はそれぞれの技術と作業スピードによって研究所が配分する。また、定期的に講習会を開いており、新しい針子を誕生させたり、また最終的に針子とならなくても趣味として個人でこぎん刺しを楽しむ人もいたり、講習会は大変人気であるという。

筆者が訪ねた際は、丁度製品が納品されてきたところで、特別に注文された大きな布製の看板にこぎん刺しで文字が刺されていたものであった。針子の中でも最高齢の方が刺したもので、刺している年数は作品にも影響し、彼女の刺したこぎん刺しの美しさは極めて素晴らしいと研究所職員から評価されている。納品された製品に間違いがあった場合は、研究所の職員が検品し、刺し間違いを直すこともある。また、雑貨店とコラボレーションした商品企画など、新たな取り組みも積極的に行っている。

同社で作り出す製品の模様はすべてモドコを基本と

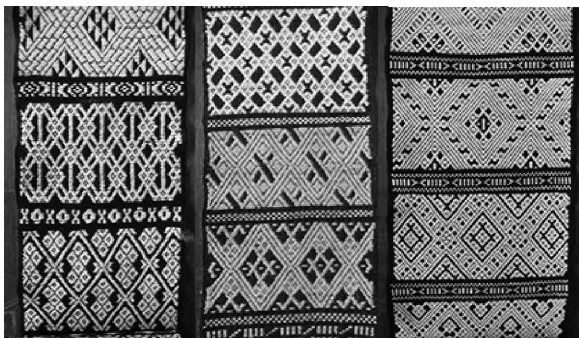


図12 弘前こぎん研究所所有  
連続模様の刺し見本（筆者撮影）

し、作り出されるアイテムは時代に合わせて変化しますが、古作で生み出された模様を忠実に守っている。さらに使用する生地や配色にも細やかな配慮がされている。生地は目の粗さや刺しやすさに配慮された麻地であることが条件であり、配色は古作の基本でもあった紺色を中心に客の要望などを参考にしながら紺・赤・紫・浅葱など計9色程が使用されている。こうした細部まで丁寧にこだわった仕事は「本物」のこぎんを伝えるという姿勢の表れである。また、研究所はこぎん刺しを産業として成り立たせることが継承していく上で必要と捉えている。研究所の製品は現在も青森県の土産品として定番となっている。また、土産品だけでなく、東京都内や各地の雑貨店でも販売されており、商品を購入した際には「津軽こぎん刺し」、「弘前こぎん研究所」の文字とこぎんの説明文が明記されたものが添付される。

### (2) 訪問先 2：西目屋村中央公民館 平和会館

弘前市外ではあるが、中津軽郡にある西目屋村中央公民館「平和会館」には、世界一大きいと言われるこぎん刺しが飾られている。縦3.6m、横7.0mのこぎん刺しの緞帳は、もとは西目屋村豪雪山村開発総合センターの舞台を飾っていたもので、現在は緞帳の役目を終え、1970年（昭和45年）10月に平和会館に寄贈された。この緞帳の製作は弘前こぎん研究所が担っており、当時はこぎん刺しの新しい提案であった。いつしか緞帳の役目を終えた巨大なこぎん刺しは、価値があるにもかかわらず、倉庫にしまい込まれていたが、発見者がいたことにより息を吹き返し、現在は堂々と展示されている。担当者は「このような大変貴重なものを当館で展示できることは非常に嬉しい。西目屋村の誇りである。」と話した。このこぎん刺しは巨大ではあるが大きな模様の中も細かく緻密に刺し綴られており、更に紺地に白い綿糸で刺されているため、古作のような風合いが残る（図13）。



図13 西目屋村中央公民館  
こぎん刺しの緞帳（筆者撮影）

### (3) 訪問先3：佐藤陽子こぎん展示館

「佐藤陽子こぎん展示館」を営む、こぎん刺し作家の佐藤陽子氏は定年退職後、2010年（平成22年）に自宅2階を改装し、私設展示館を始めた。佐藤氏は、故前田セツ氏<sup>17)</sup>に師事し、こぎん刺し歴は40年という。

展示館には、古作、新作、創作と分けられた作品が常時百数十点、展示されている。古いものは120年から150年前の貴重な資料も展示されており、数点は実際に着用でき、著者も実際に着用した。身頃にびっしりと模様のあるこぎんは見た目よりも重く、しかしその割に薄い。いくら綿糸で刺し埋めてあっても決して暖かいとは言えないものであった。当時の人々の生活の厳しさと根気を体感した。ひと針ずつ丁寧に刺された綿糸は、長い月日が経過しても模様ははっきりとし、非常に美しいという印象を受けた。一着にもたくさんの模様が組み込まれ、まるでその当時の人々の思いが伝わってくるようであった。佐藤氏は「来館者に着てもらい、当時の感触を確かめてほしい。貴重なものだけど、実際に触れてもらっている。」と話した。

佐藤氏は自身も作家として、日々新しい作品を制作している。基礎模様であるモドコの組み合わせと、刺し施すものによって表現は無限であると語った。

以前は、故前田セツ氏の展示施設があったがその閉館を惜しみ、津軽の財産であるこぎん刺しを見せる場として展示館の開館に至った。近所の住民や市民も展示館を訪れ、こぎん刺しの価値を見直し、また他県からも多くの人々が来館し、こぎん刺しの普及に大いに貢献していると言える。

作品は実に様々であり、りんご型のクッションや、バッグ、シャツやワンピースなど、現代のライフスタイルに即したアイテムを制作し現代に取り込みやすいよう、工夫がされていた。

### (4) 訪問先4：青森県弘前市役所

青森県弘前市役所では、1階の市民課総合窓口の看板や、カウンターの窓口番号、テーブルクロスなど、目につきやすい場所に多くのこぎん刺しが用いられていた。職員によると、「こぎん刺しに馴染みのある市民でも、カウンターのこぎん刺しを見つけると、近くで見たり、触れたりしてその良さを再確認していく人も多い。」とのことである。さらに、申し出れば使用されている模様の図案をもらうことができ、人々が再現しやすいよう工夫がされている。こぎん刺しの設置だけでなく、市役所で使用している封筒にはこぎん刺しの模様がプリントさ

れており、市内外の人々を問わず、こぎん刺しを目にする機会が増えるよう積極的にこぎんをPRしている。

### (5) 訪問先5：公共施設「ヒロロ」

弘前駅前からほど近い、ショッピングモール&公共施設「ヒロロ」内にある、弘前市行政フロア「ヒロロスクエア」においても訪問先4同様、案内の文字に実際にこぎん刺しが施されていた。

総合行政窓口では、窓口番号とテーブルクロスにこぎん刺しが用いられており、また、壁にはこぎん刺しのパネルが飾られていた。職員によると、「受付の待ち時間に近くについてパネルを見る人が多くいる」とのことである。また、パネルはモドコを組み合わせた様々なものが計10枚設置されており、その中にこぎん刺しの説明が書かれたパネルが組み込まれ、こぎんの誕生背景など歴史の説明がされていた。このような活動によりこぎん刺しの認知度を高めることができる（図14）。



図14 公共施設フロア「ヒロロ」内、総合行政窓口番号に使用されるこぎん刺し（筆者撮影）

## 2. 調査からみるこぎん刺し

以上のように、現在においても弘前の地ではこぎん刺しを伝統であり誇りとして、積極的に語り継いでいく姿勢が伝わってきた。製作・販売をする施設では、古作の研究による本来の技術と精神を受け継ぎ、模様にはモドコの使用が徹底されていた。また生地選びや配色にも細やかな配慮がなされ、伝統を重んじつつ現在の生活に取り入れて行こうとする確固たる意志が感じ取れた。

こぎん刺しの普及を目的とする施設は、本来とは大きく異なる使用方法ではあるが、案内表示など人々の目につきやすい場所に用いることで、結果的に認知度を高めることに繋がっていた。さらに、その他の例として青森県下の小中学校では家庭科などの授業を通してこぎん刺しの実習を行う所が多く、教育機関でもこぎんを途絶えさせまいと、地域一丸となりこぎん刺しの伝承に貢献している。

## VI. おわりに

こぎん刺しは補修・保温面での工夫と、規制の中での美しさの追求と、更に作ることの喜びを兼ね備えた、まさに津軽の女性たちの知恵と技術の結晶であると言える。

当初は紺地に白糸で施すことしかなかったが、再興以降は多種多様な材料が手に入るようになり、時代ごとの人々に合わせた配慮がなされ、こぎん刺しも少しずつ変化を遂げてきた。現在の模様は、かつてのモドコを中心とした、広範囲で緻密かつ大胆な連続模様のものから、概念に捉われないような小範囲で単純なものが多く見受けられるようになった。

こぎん刺しの機能的意味が消え去った現在、残ったものは美しい幾何学模様であり、それは今後も創意工夫がなされ、変化を続けていくであろう。しかしその過程で現状起きていることとは、刺し方と模様における規則の曖昧化である。つまり見た目や、「かわいらしさ」ばかりが重視され、模様の特徴点を見失いながら自由な発展を遂げていくなれば、それはもはやこぎん刺しではなくなり、刺し子という広義での認識となる。そして結果としてこぎん刺しの持つ、緻密さと大胆さから成る幾何学模様の消滅へと繋がる。それらを防ぐためには、制作者は模様の要である奇数律の法則に則り、モドコを基本とした柄を展開することが必要である。また、手軽な小範囲の作品や商品だけでなく、古作に通じるような広範囲に及ぶものも合わせて制作し、時間と労力を惜しまず継続していくことが求められる。そして制作者、販売者および消費者がこぎん刺しの歴史背景を理解することが重要である。例えば弘前こぎん研究所が行っているように、商品にはこぎん刺しについての説明文を添付することや、商品を古作の実物や写真と合せて展示販売するなど、消費者が本来のこぎん刺しについて知るきっかけを兼ね提供することが非常に効果的であると考えられる。それらのひとつひとつが今後のこぎん刺しの継承へと繋がっていく。時代に合った新たなアイデアが、古作のこぎん刺しやその誕生背景、またそれらを受け継いだ人々の意思と共に発信され、こぎん刺しの美しく力強い幾何学模様が今後へと伝承されていくことを強く望む。筆者自身も今後に向けて更に研究を重ね、こぎん刺しの継承に貢献できるような作品の制作を行っていききたい。

## 注・引用文献

- 1) 『STORY』株式会社光文社 pp.222-224 2013年8月号
- 2) 徳永幾久『刺し子の研究』衣生活研究会 pp.42-44 1989年
- 3) 弘前こぎん研究所『津軽こぎん刺し 技法と図案集』株式会社誠文堂新光社 p.146 2013年
- 4) 徳永幾久『刺し子の研究』衣生活研究会 p.80 1989年
- 5) 前掲書3) p.143
- 6) 坂村格『津軽こぎんと刺し子 はたらき着は美しい』LIXIL出版 p.66 2013年
- 7) 前掲書3) p.155
- 8) 柳宗悦『民藝四十年』岩波書店 p.159 2013年
- 9) 民藝編集委員会『民藝九月号第六九三号』日本民藝協会 p.5 2010年
- 10) 柳宗悦『手仕事の日本』岩波書店 p.110 2013年
- 11) 前掲書3) p.158
- 12) 前掲書9) p.5
- 13) 前掲書3) pp.10-57
- 14) 1948年に設立し国立国会図書館法、納本制度により日本国内で発行されたすべての出版物が保管されている。  
<http://www.ndl.go.jp/index.html> (閲覧日: 2014年8月5日)
- 15) 一般社団法人日本雑誌広報協会広告問題対策委員会雑誌分類認定委員会  
<http://www.zakko.or.jp/subwin/genre.html> (閲覧日: 2014年8月5日)
- 16) 布芸展『こぎん刺しの本 津軽の民藝刺繍』文化出版局 p.2 2009年
- 17) 1919年生まれこぎん刺しの調査普及に貢献した人物。前田セツ『津軽こぎん刺し』株式会社日本ヴォーグ社 p.13 1976年

## 図版出典

- 図1) 横島直道『津軽こぎん』日本放送出版協会 pp.34-35 1974年
- 図2) 前掲書1) p.36
- 図3、4) 民俗民具研究所『津軽、南部のさしこ着』日本原燃株式会社 p.2 2000年
- 図5) 前掲書3、4) p.36
- 図6) 弘前こぎん研究所『津軽こぎん刺し 技法と図案集』株式会社誠文堂新光社 p.109 2013年
- 図7) 前掲書6) p.77
- 図8) 前掲書6) p.10
- 図9) 布芸展『こぎん刺しの本 津軽の民藝刺繍』文化出版局 p.21 2009年
- 図10) <http://www.iichi.com/listing/item/321437>  
(閲覧日: 2014年9月10日)
- 図11) 株式会社ブティック社『かんたん、かわいい、こぎん刺しのこもの』株式会社ブティック社 p.23 2013年